

光の詩学

——エズラ・パウンドからダイアン・ディ・プリマへ

小川 聡子

はじめに

ビート派の女性詩人でサンフランシスコの桂冠詩人でもあったダイアン・ディ・プリマ (Diane di Prima, 1934-2020) は同世代の詩人たち同様、アメリカン・モダニズムを代表する詩人、エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) に大きな影響を受けている。アメリカ詩においては、ウィリアムズ (William Carlos Williams, 1883-1963) に代表されるリアリズムの詩に対して、もう一つの神秘主義的な詩の伝統がある。目には見えず、手に触れることのできないものについて書く伝統である。パウンドはこの伝統に属する詩人であり、ディ・プリマもその伝統の後継者といえる。この小論では、これまであまり語られたことのないディ・プリマとパウンドとの詩的交友を紹介し、ディ・プリマの伝記とパウンドにあてて書かれた四編の詩を取り上げ、ディ・プリマのパウンド像を明らかにしたい。

それらの詩篇を読み解いていくと、アートと人生を一つのものとして生きた詩人、そしてヴィジョンを追求した詩人、というパウンドの二つの側面がみえてくる。そして、ディ・プリマがパウンドから受け継いだものが、西洋世界において連綿と受け継がれてきたヴィジョンナリーな詩の伝統、Visionary Tradition であり、その中核をなすものが「光の詩学」というべき、光を追い求める詩学であったことを確認したい。

“St.Liz” での出会い

1953年、大学をドロップアウトしたディ・プリマはニューヨークのロウアーイーストサイドに移り住み、まず『キャントーズ』を読み通した。多面的でこの上なく難解なこの詩篇は、その部分に目をつぶったとしても、この若いアーティストを魅了するだけの力を十分に持っていた。また、『キャントーズ』は、ディ・プリマに中世ヨーロッパへの扉を開き、自らの伝統に回帰する入り口を指し示した。幼い頃、イタリア人の祖父にイタリア語でダンテを読んでもらっていたディ・プリマにとって、パウンドは自分のアイデンティティーを追求する長い旅の先達となった (*Recollection of My Life as a Woman* 140)。

ニューヨークシティで詩だけでなく、ジャズや踊り、シアターから多くを吸収しながら、パウンドの『詩学入門』で薦められている本をすべて読み詩の技巧を学び、それらを若者たちが使っている話し言葉で表現した。大学をドロップアウトして、ニューヨークシティという大学と、エズヴァーシティ、つまりエズラの学校に学んだと言えるかもしれない。そしてこの敬愛する詩人に手紙を出し、1956年の春に、聖エリザベス病院を訪ねている。パウンドと親しかったSheri Martinelli という画家の家に宿泊し、二週間ほど面会に通った（高橋・小川 85-86）。そのときのことを回想する詩、“November 2, 1972”では、ある日、パウンドが「お腹に入れなさい」と言って、包みを手渡してくれたエピソードが語られる。

“you handed me stolen food as I left / saying “line those stomachs” / saying “poets have to eat”（帰り際に盗んだ食べ物を手渡して、言いましたね／「お腹に入れなさい」と／「詩人は食べなくてはね」と）（*The Poetry Deal* 39）。

「詩人は食べなくてはね」という言葉は、創作にはエネルギーが必要だ、ということもあるが、たくさんの詩を読み、それらを体内に取り組むことを意味する。“line those stomachs”のlineは、動詞で「詰め込む、満たす」という意味だが、詩のlineのこともかけられている。“stolen food”とは、パウンドが食堂からこっそりくすねてきたものということかと思われるが、詩というものが過去から続く共同体によって書かれているものとすれば、新しい詩とは、過去の詩人たちの作品から盗んできたものと言えるかもしれない。

ディ・プリマの自伝、*Recollection of My Life as a Woman*（『女としての私の人生の回想録』）に、その訪問の際にパウンドからきいたというエピソードが書かれている。パウンドがヴィヴァルディ（*Antonio Vivaldi*）の楽譜を恋人のOlga Rudgeのために書き写したが、ドレスデンの空爆で現物は焼失してしまったこと。Sheri Martinelli もまた、たいへん入手困難だった顔料をパウンドの口利きで入手することができたこと。それらのエピソードはディ・プリマの心に深く響いたという（144）。

Stories like this made a deep impression on me. They made me realize that what is saved, the shards we call civilization, is saved by a few. By people photographing, or copying by hand. Today as I sit here writing at my computer, I think of the library I've put together since then, the alchemy books old and new I've xeroxed for students. Stuff I've copied out by hand. How much of that came out of the Vivaldi story. (144)

私たちが文明と呼んでいるものの破片は、ごく少数の人たちが写真に撮ったり、手で書き写したりすることで手から手へと受けわたされてきたのだ。これまであちこちの図書館で学生たちのために文献のコピーをとってきたが、それがどれだけそのヴィヴァルディのエピソードに触発されたものだったか、ということにディ・プリマは思いをはせる。このようにし

て、火種となるものは手から手へ、心から心へと受け継がれていくのではないだろうか。

60年代の「革命」とパウンドの影響

パウンドは中世の吟遊詩人たち、トルバドゥールの詩人たちについて、“divorce of art and life”「アートと人生の乖離」がなかったと書いている (*The Spirit of Romance* 87)。詩を書き、詩を生きること。アートと人生をひとつのものとして生きること。これは、パウンド自身の生き様にもあてはまる。文学のみならず、政治、経済、広く文化を論じ、政治活動に果敢に身を投じ、詩の中にそれらすべてを投入した。数々の過ちも指摘されているが、このような行動する詩人としての生き方は、後続の詩人たちの60年代から70年代にかけての「革命」の意識に大きな影響を与えた。そのことを60年代の終わりに書かれた “for E.P.” (*Selected Poems 1956-1976*) という詩にみていきたい。

the way is the way of love, the craft
proceeds from the heart center, the quick brain
is water, only, involuted & fire
dwells in the spine. But how reverse
dispatches long broadcast without undermining
the root? Silence
grows around you like bright moss
on marble, hiding the subtle veins (267)

方法は愛によるもの、技は
心の真ん中から生じる、すばやい頭の動きは
水、だけれど、渦をまき、火は
脊柱の中にある。でも、どうやって逆のものが土台を掘り下げずに
長ったらしい演説を放送するのか？沈黙は
大理石の上に輝くコケのように
あなたを包む、とらえがたい模様を隠して

冒頭、詩のクラフトについて語っている。the way of writing, 書く方法は愛によるもの、わきあがってくるセンセーション、エネルギーを持って書くということではないだろうか。poetic craft, 詩の技巧は心の真ん中から生じる。頭は素早く回転し、血液が身体中をめぐる。頭だけでなく、身体全体からわきあがってくるものを書け、ということだろう。長ったらし

い演説とは、パウンドが行ったローマ放送についての批判かもしれない。沈黙が大理石をコケのように覆っている、とは、パウンドが晩年沈黙してしまったことを指すと思われる。その沈黙は、とらえがたい模様、優れた良いもの、パウンドの詩を隠してしまっている。

who else in these years
has glimpsed the goddess moving in the dark
the loba in the swollen forest where wind
scatters virtu

あなたのほかにいったい誰がこの時代に
暗闇の中にうごめく女神の姿を見ただろうか
肥大する森の中の雌狼を
秘められた^{グイルトウ}力をけちらしてしまう風の吹く森の中で

パウンドこそ、暗い森の中にうごめく女神の姿を目撃した人物であるとされている。この loba とは、パウンドの詩 “Pierre Vidal Old” (*Personae* 28) に出てくる雌狼のことだとディ・プリマ本人が語っている（インタビュー小川）。Piere Vidal はプロヴァンスの吟遊詩人で、ペノーティエの Loba への愛のために狼になって走り、カバレー山中で獵犬に狩りだされたという話が伝えられている。パウンドは Vidal の声を現代に蘇らせ、情熱的な愛をうたった。そして、その森は不気味に膨れ上がっており、風が virtu をけちらしてしまっている。この virtu とは、ラテン語の virtus（徳）に由来し、イタリア語で徳、効力を意味する。パウンドは、この virtu によって、我々は宇宙で唯一無二の存在となっているのだと述べている（*Selected Prose* 1909-65, 28）。また、Canto 36 の Guido Cavalcanti のカンツォーネ「ドンナ・ミ・プレーガ」にこの語がでてくる。Terrel が指摘するように virtu は Potenza (force) と区別されており、潜在的な力、内なる秘められた力を指している（142）。森のその内なる力は風にけちらされて粒子のようなものになってしまっている。ここで loba は、森の女神であり、美しいもの、もしくは女性原理を表しているように思われる。また、暗闇にかすかにみえる光でもあるのかもしれない。

terrain
none is certain of, mapped
held in the hand, we turn on the turning edge
of the two seas, turning those charts
in our hands; the light

shines out of them, tho the angle of the true north has
shifted: & sitting awkward
& frightened before our driftwood fires we trace
your surmise, watch the black dance
of money, deathstruggle; the heart
does not fail, though the line thickens, we frame
message to your enigma:

そして、航海のイメージが展開される。不確かな領域の中、地図を手に、二つの海が交わるところで向きを変える。この二つの海とは、モダニズムの時代とポスト・モダンの時代のことを指しているのかもしれない。「私たち」はまさに新しい時代を進もうとしているのだ。光を放つ海図とは、パウンドの詩を表しているのだろう。しかし、方位磁石がぶれて、真北の方角が変わってしまった。新しい混沌の時代に、古い地図はそぐわなくなってしまったのだ。そして、燃える火の中に金の黒い踊り、その断末魔のあがきを見る。この推測とは、C.H. Douglasの「社会信用理論」に感化されたパウンドの経済論のことだと思われる。しかし、詩行は不明瞭になり、謎めいていく。

hear your constant answer, rising:

OUT OF ALL THIS BEAUTY
SOMETHING MUST COME

「父よ、あいつらの跡をつけて
ねぐらをつきとめました。」

あなたのいつもの答えが、立ちのぼるのを聞く

この美しいものすべてから
何かが生まれてくるに違いない

そして、「私たち」の考え出したメッセージは、あいつらの跡をつけて、ねぐらを突き止めた、ということである。筆者は1996年にこの詩についてディ・プリマに質問する機会に恵まれ、このようなコメントをいただいた。「私たちは問題の根源をつきとめたと感じていました。つまり、貨幣の不正操作（manipulation of money）の原因をつきとめた、ということです。資本主義をすり抜け、今も私たちがみているように、実際に通貨は操作されているのです。そして私たちは、パウンドに黙っていないで発言してほしい、と願っていました。問題の根源はつきとめたのです。でも、パウンドからの答えは、ずっと前に書かれた詩の一節のみでした。」（インタビュー小川）ねぐらをつきとめた、とはつまり、問題の根源、貨幣の不正操作の原因をつきとめた、ということだ。

60年代の「革命」は、イデオロギーの問題ではなく、意識改革であった。68年にサンフランシスコに移住したディ・プリマは「革命」の仕事、「ディガーズ」Diggers¹の活動に深くかかわっていた。Diggers はカウンターカルチャーの中でも硬派的態度を貫いた少数派で、貨幣を否定して新しいコミュニティをつくろうとした。当時25あった都市型のコミュニンに無料で食料を配布するなど、様々な試みを実践した。ちょうどこのころ書きはじめられたレター形式の詩集 *Revolutionary Letters* の9番で、貨幣制度そのものに疑問を投げかけ、パウンドの貨幣についての考えに言及している。「パウンドのお金、すべての人に郵送される日付の入った30日有効のクーポンは今でもいいアイディアだ」（15）。Diggersの仲間内では、“Free Bank” なるものを設け、お金を共有する試みをした。パウンドの理論をヒントに、新しい社会の実験を行ったのである。ギンズバーグ（Allen Ginsberg, 1926-1997）もパウンドの貨幣論を評価し、「パウンドは銀行や貨幣の仮面をはぎとって、その正体をあばいた。」（新倉155）と述べている。銀行が発行しているお金は、本来は政府が発行しているものなのだ、という考えである。

そして、パウンドからはいつもの答えが立ちのぼってくる。「この美しいものすべてから／

何かが生まれてくるに違いない」という言葉は、Canto 84にある。この世に存在するあらゆる美しいものをとらえ言語化し、新しい詩の世界をつくりだすこと、これこそが詩人の使命なのだ。混乱の60年代が終わる頃、革命に携わる若い詩人たちは、パウンドの言葉を求めていた。しかし、パウンドは沈黙の中に、変わらぬメッセージを送り続けていたのではないだろうか。

1981年のインタビューでディ・プリマは自身にとっての革命について、このように語っている。“The business of struggle, and revolution, is to me not separate, is not different from the seeking of light, this visioning of the world. The heart of revolution is the visioning of a transformed world, a new heaven and new earth.” (*Rocky Ledge* 42) それは外的な闘争であり、内的な自己探求であり、詩的なヴィジョンの模索でもあった。闘争と革命、光の探求と世界のヴィジョンを描くことは、すべて同じことであり、革命の核となるものは、変容された世界、新しい天と地を描くことにあったのである。美しいもののみならず、政治、経済、歴史など、人生に結び付くものすべてを詩に取り込み自分の詩的世界を描いたパウンドは、自分の信念に従いそれを発信し、行動する詩人だった。art とlifeを一つのものとして生きた詩人と言えるのではないだろうか。目の前で起こっている革命と創作とをわけることなく、ひとつのものとして生きようとしたディ・プリマの理想とする詩人像を、パウンドは体現していたのである。

ヴィジョンの詩人

パウンドの死後、1976年ごろに書かれた“THE RINGMASTER” (*The Selected Poems 1956-1976*) という詩に、ヴィジョナリーな詩人としてのパウンドの姿をみることができる。モダニズムの興行主（インプレッサリオ）と呼ばれたパウンドにあてた詩である。パウンドと「私たち」の対話という形をとっている。

the light	モンセギュールの
at Montsegur	光が
falls on / no stone	さす / 石はない
he said, when you get there	彼は言った、そこに着いたら
something stops. What	なにかがとまるのだ。 なにか
stops? we asked. The fire (356)	とまるのですか？と私たちはたずねた。

モンセギュールはフランス南部の村で、その山頂には難攻不落の城があり、13世紀にアルビジョワ十字軍によるカタリ派討伐の最後の砦となった。改宗を拒んだ何百人という人々が火

刑に処されたという。また、アポロを祀った神殿のあった場所でもあり、太陽の力の信仰ともかかわっている。山の頂に光は降り注いでいるが、石一つない。石とは、亡くなった人たちのことを指しているのかもしれない。その城跡に立った時、時が、思考が、止まるように感じるのではないだろうか。

in my bowels is the angel	私の内なる炎は
of the golden ladder. Is it	黄金の梯子の天使。それは
broken? Are these precisions	壊れているのですか？ その正確さは王が
in the king's	不具の体になったことを示しているのですか？
maiming? Accuracies	痛みを
of pain count	正確にとらえることは大切なこと
they are stars & overtone	それは星 そして倍音

黄金の梯子の天使とは、旧約聖書創世記にでてくるヤコブの梯子を上り下りしている天使を連想させるが、それを体内の bowel, 腸、はらわたの炎と表現している。またそれは、雲から地上にのびる光のことでもある。天と地を自由に行き来する炎は、自分の体内にあるのだ。この王とは、パウンドのことを、壊れた梯子はパウンドの詩をさしているのかもしれない。痛み、苦しみを正確に言語化すること、詩にすること、は詩人の使命だ。そしてそれが星であり、倍音である、と視覚的に、また音の響きで表現している。

vowels pulse / they beat	母音は 脈動し / ビートを
drums in our ancient	きざむ 私たちの古の
jungle. Beasts throw off	ジャングルで。 獣たちが光を
light & it's moonless & yr eyes	放つ 月はなく あなたの瞳は
send rays just so far, a ring	光線を発している、
3 feet, around yr footsteps	三フィートの輪、あなたが歩くと
not only trees. bent aside.	道をあける。 木々だけでなく。
harpsichords. boxers	ハープシコード。ボクサーたちも

古のジャングルとは、私たちの原風景とも呼べる場所で、詩のフィールドでもある。そこに母音の音が響いている。パウンドが述べた “tone leading vowels” 「母音が導く音調」の含みがあるかもしれない (*Talking Poetics* 14)。月のない夜、獣たちの眼が暗闇に光っている。そしてパウンドの瞳は光線を放っている。その光線は3フィート、約90cmのリングの輪をつくる。木々や、ボクサーたちが道をあける様は、ギリシャ神話のオルフェウスの姿に重なる。

る。オルフェウスはその歌で鳥や獣、木々や小川や空など、ありとあらゆるものを魅了したという（山室 175）。ハーブシコードの音と、ボクサーたちの姿で詩は閉じられる。ボクサーとは、詩人であるとも考えることも可能であろう。なぜならパウンドは、実に多くの詩人たち、そしてアーティストたちのリング・マスターであったからだ。

また、ここで描かれる光は燦燦と照る太陽の光ではなく、夜の森、暗闇の中でこそ輝く種類の光であるということが読み取れる。ディ・プリマにとってのパウンドは、暗闇の中に見えないものをみる人、ランボオの言うところの「見者」、ヴィジョンをみる人、ともいえるだろう。

2001年に書かれた“SESTINA: The Tent at Pisa”² という詩にもヴィジョナリーのパウンドの姿がある。この詩ではCanto 79のリンクスとパウンドの姿を描いている。リンクスはディオニソス神に従う大山猫で、その眼が輝いていることから、ラテン語・ギリシャ語のLynx (light) と関連がある。パウンドにとっては、自分のぶどう畑、詩のフィールドを守る守護神の役割を負うミューズでもあるようだ。結びの部分引用する。

Oh poet of sunrise whose songs raise terrible
Questions like tangled vines. Your mind an edge:
sadness of flame. Or the wild eyes of lynxes.

おお暁の詩人よ その歌は蔓のようにからまった
恐ろしい問いを投げかける。あなたの精神が刃
炎の悲しみ。もしくはリンクスの野生の目。

その歌は蔓のようにからまった謎めいた問いを投げかける。その精神がエッジ、刃であり、たしかに新しい時代を切り開いたのだ。しかし、その炎の悲しみをディ・プリマはみている。リンクスの野生の目はパウンドの目と重なる。それは、みえないもの、ヴィジョンをみている詩人の目なのである。

Visionary Tradition

ディ・プリマについての研究書は多くないが、アメリカ文学者のDavid Stephen Calonneが2019年に優れた研究書 *Diane di Prima: Visionary Poetics and Hidden Religions* を著した。Calonne はディ・プリマの美学におけるパウンドの影響をこのように分析している。まず、パウンドが新プラトン主義などの異端の思想に精通していたことを挙げている。プロヴァンスの文化に源を持つグノーシス主義の哲学にパウンドは長年強い関心を寄せていた

が、これらの思想への関心はディ・プリマにも受け継がれている。また、イマジズムの手法を詩作に多用していること、そしてその作品において、パウンドの哲学的なアイディア、時に奇抜な政治経済に関する概念、そして詩学について、対話を続けていることだ、としている(32-33)。

ディ・プリマがパウンドから受け継いだものを Calonne の指摘に付け加えると、それは、太古のヨーロッパから時を超え、場所を変え、脈々と受け継がれたヴィジョナリーな詩学、光の詩学とでもいうべきものではないか、と私は考えている。自分が属する“poetic lineage”「詩の系統」を聞かれると、それはVisionary Tradition「ヴィジョナリーな伝統」であるとディ・プリマは答えている。そして、変容の可能性を追求するこの伝統に属する人たちは、パウンドやキーツ (John Keats)、H.D. そして錬金術師のパラケルスス (Philippus Aureolus Paracelsus)、ダンテ (Dante Alighieri)、カヴァルカンティにまでさかのぼっている (Rocky Ledge 41)。目の前にある現実を変容させ、新たなリアリティーをつくりあげること。そこに生じる世界はリアルなものなのだ。ディ・プリマはそのことを、このように述べている。“if you could imagine anything clearly enough, and tell it precisely enough, that you could bring it about.” (*Talking Poetics from Naropa Institute* 18)「もしあなたが何かを十分に鮮明に心に描き、それを十分に正確に述べることができるなら、あなたはそれに命を吹き込むことができるだろう。」何かをみて、みたものを正確にとらえ言語化することができたなら、この世にその世界を生じさせることができる。そしていったん生じたその世界は、決して失われることがないのだ。

パウンドもヴィジョンの力を信じており、こう述べている。「ダンテのヴィジョンは本物だ、何故なら彼はそれをみたのだから。ヴィジョンの歌は本物だ、何故なら彼はそれを生きたのだから。」(*The Spirit of Romance* 178) たしかにみたのであれば、それはリアルなものであり、生きたさまをそのままを詩に書くならば、その言葉には真実がある。

光の詩学

光は『キャントーズ』のライトモチーフの一つであると言われている。³ パウンドは光を崇めるプロヴァンスの伝統を受け継ぎ、世界は天上の物質が光となって浸透してつくられた、というプロティノス (Plotinus)、グロステスト (Robert Grosseteste)、エリウゲナ (Johannes Scotus Eriugena) などの思想に深く共感していた。そしてその光とは、エレウシス⁴から放たれたものだとパウンドは述べている。「エレウシスから放たれた光は中世を生き延びて、その美をプロヴァンスとイタリアの詩歌にあらわした、と私は考えている。」(“Credo” in *Selected Prose 1909-1965* 53) そのエレウシスから放たれた光を最も見事に表現したのはもちろんダンテだが、パウンドはカヴァルカンティを高く評価していた。

Canto 36「ドンナ・ミ・ブレーガ」の翻訳は『キャントーズ』の思想的な光源のひとつとなっている。愛に色はなく、目には見えない。しかしそれは暗闇に潜む光であり、肉に宿る魂の営みであるという。『アメリカン・モダニズム』にて、三宅昭良はこの詩の第10スタンザを訳し、このように述べている。

「愛は聞くもの 形を見ず / その光射にみちびかれるもの / 色から発し、分かたれて / 闇を切り裂いて / 光は生まれ 暗闇をけずる / あらゆる虚偽から 分けられ 分かたれ / 信頼に足る / 彼からのみ 慈愛が生じる」(C, 36/179)

愛は光と化して自己を伸長する。すべての闇と肉をこえて自己を純化する。ここで〈宇宙の生成〉と〈光の誕生〉と〈愛の発生〉とが同一のこととして語られている。愛の極限の姿は、〈宇宙〉そのものである光を魂のうちに宿すこと。これが、パウンドがカヴァルカンティの哲学詩のなかに見た（と信じた）〈愛の秘義^{エレウシス}〉にほかならない。(55)

愛は光となり、自己の純化、伸長を促す。愛の秘儀とは、愛と光と自己が溶け合う境地、愛による解脱のことである。そして、生身の身体を持ってこそ、その境地に至ることが可能になるのである。

詩人の眼にはみえないものが映り、その耳にはきこえない声が届くことがある。そのヴィジョンは、啓示でもある。“The Spirit of Romance”「ロマンスの精神」というディ・プリマの詩の中に、このような一節がある。“Oracle where we/ are present to the Word / & cast of Light. (Pieces of a Song 138)「託宣とは、私たちが / コトバと、そして降りてくる光に / 向き合う場所」ヴィジョン、コトバは光として、降りてくるのである。

Talking Poetics from Naropa Institute (1978) の中で、詩は光から成っている、とディ・プリマは述べている。“IT SEEMS TO me more and more as I get more and more deeply into poetry that the actual stuff that poetry is made out of is light.”（「詩に深く入り込むほど、ますます強く感じることは、詩が光によってできているということなのです。」）(13) そして、詩の最も崇高な目的は、その光の感覚をつくりだすことだ、と続けている。またその光とは、瞑想する時に生じる光と同種のものであるとしている。この光とは、詩を読んである心情や情景を自分のものとして感じる時のセンセーション、詩的なエクスタシーのことではないだろうか。対象と同化し、わきあがるセンセーションに自分という意識が消える瞬間、解放の意識ともいえるだろう。この瞬間は、書き手だけでなく、読み手にも訪れる。双方がこの瞬間を共有することもある。書くことも、読むことも、本質的に光を求める行為なのである。

まとめ

以上、みてきたように、ディ・プリマがパウンドから学んだものは、詩の技巧だけではなく。行動する詩人としての姿勢を、パウンドから受け継いだと言えるかもしれない。それは、アートと人生を切り離さず、ひとつのものとして生きることでもある。目の前で起こっていることすべてを自分の中に取り込み、そこから新しい世界を創造すること。自分のみたヴィジョンに忠実に書き、そのヴィジョンを生きること。そしてそのヴィジョン、光は、古の時からたくさんの手をへて、パウンドからディ・プリマにも手渡されたのである。

*本稿は、2022年11月13日に獨協大学にて開催された日本イエイツ協会日本エズラ・パウンド協会合同大会での口頭発表原稿を加筆修正したものである。貴重なご助言を賜った先生方に心からお礼申し上げる。

注

1. Diggers サンフランシスコのヘイト＝アシュベリーを拠点とした前衛活動家達の団体。
『60年代アメリカー希望と怒りの日々』（トッド・ギトリン著）に詳しい記述がある。
2. セスティナ Arnaut Danielによってつくられた六行六連体のプロヴァンス語詩形。
3. “This image of light is one of the dominant images in *the Cantos* and later prose works, and it is used by Pound in a Neoplatonic sense as an image to depict man’s awareness of the permanent, a literal flash of insight.” Peter Liebregets, *Ezra Pound and Neoplatonism* (2004)
4. エレウシス 豊穡の女神デメテル崇拝の中心地であり、秘儀が行われたと伝えられている。

参考文献

- Calonne, David Stephen. *Visionary Poetics and the Hidden Religions*. Bloomsbury Academic, 2019.
- Di Prima, Diane. *Fun with Forms: A few Recent Poems*. Eidolon Editions, 2001.
- . *Pieces of a Song: Selected Poems*. City Lights Books, 1990.
- . *Recollection of My Life as a Woman: The New York years*. Viking, 2001.
- . *Revolutionary Letters*. 50th Anniversary Edition. City Lights Books, 2021.
- . *Selected Poems 1956-1976*. North Atlantic Books, 1977.
- . *The Poetry Deal*. City Lights Foundation, 2014.
- . “Light/And Keats.” *Talking Poetics from Naropa* Institute. Anne Waldman and

- Marilyn Webb eds. Shambhala, 1978. pp. 13-37.
- , "Interview with Diane di Prima" by Anne Waldman. *Rocky Ledge*. no.7. Feb/Mar. 1981. 35-49.
- . Interview with Diane di Prima. by Satoko Ogawa. Boulder, Colorado. July 12. 1996.
- Pound, Ezra. *Personae*. New Directions, 1990.
- . *Selected Prose 1909-1965*. New Directions, 1973.
- . *The Cantos*. Faber and Faber, 1990.
- . *The Spirit of Romance*. New Directions, 1968.
- Terrell, Carroll F. *A Companion to The Cantos of Ezra Pound*. University of California Press, 1993.
- 鈴木和成訳編『ランボー詩集』思潮社、2009年。
- 高橋綾子、小川聡子編訳『現代アメリカ女性詩集』思潮社、2012年。
- 富山英俊編『アメリカン・モダニズムーパウンド・エリオット・ウィリアムズ・ステイーンズ』せりか書房、2002年。
- 新倉俊一訳『エズラ・パウンド詩集』小沢書店、1993年。
- 新倉俊一訳『ピサ詩篇』みすず書房、2004年。
- 山室静『ギリシャ神話―対北欧神話』社会思想社、1987年。